



情報処理学会誌に 求められるもの

川合 慧

東京大学 kawai@acm.org

今号より無謀にも学会誌の編集の世話役を担当することになった。名編集長の呼び声の高い和田英一先生の役を引き継ぐのはいかにも気が重いですが、学会のためにできる限りの知恵を絞りたいと思っている。会員・読者諸氏のご支援をお願いしたい。

大抵の学会では「××学会誌」という名の定期刊行物を発行している。その見映えや内容はさまざまであるが、本質的な位置づけはその学会のフラグシップというところであろう。旗艦が沈没してしまえばその艦隊はバラバラになってしまう。そうならないように、皆様のお力をお借りして進めてゆきたいと考えている。

筆者の学生時代に読んだ覚えのある情報関係の和文雑誌は、当学会の「情報処理」と当時の通産省電気試験所の「電気試験所彙報」だけであった。もちろん企業の研究所の報告書もあったが、見た覚えのみで読んだ覚えがない。この2冊とCACMで研究生生活をスタートしたと言っても間違いではない。とにかく、創刊後数年であった学会誌の内容は、論文からプログラムまでもカバーしていた“総合刊行物”であった。その後論文誌や英文誌などが作られ(英文誌はその後中断)、学会の活動範囲が広がり分量も増えるに従って、会誌の役割も変化していったものと思う。

学会誌はどのような方向を目指すべきなのだろうか。この件については学会の会員構成を考える必要がある。会員の求めない内容ばかりでは会費をいただいている学会としては不都合きわまりない。個々の先進技術や高度な理論に関する内容ばかりでは、満足される学会員の割合が大きいのと思えない。そうかと言って、すぐに使えるノウハウ的な内容に関しては、一般に販売されているさまざまな解説本に太刀打ちできるはずがない。

情報処理学会がカバーする分野は拡大の一途をたどってきた。その様子は全国大会の予稿集の厚さの増大にも表れている。昭和45年度の予稿集の厚さが17mmであったのに対し、昭和56年度の講演論文集は前期と後期とを合わせると83mmと約5倍にもなっている。今から25年前にしてこの状況であった。また、情報処理の各分野を専門とする学会も数多く作られ、それぞれ盛んな学会活動を行ってきている。このような状況の中では、一般の学問研究と同様に、タコツボに陥らない、ある程度広い視野を持つことが、研究上も実用上も非常に大切である。このための、細分化された各分野を越えた理解の材料を提供することが、学会誌の1つの役割であろうと思う。材料としては、種々の知識に限らず、研究・開発に携わる人の輪も大切である。

プログラミングと教育について一言。プログラミングについては、ほとんどすべてがパッケージ化されている現実のソフト作りから遊離して「古い」という意見と、手続き記述の基本、あるいは論理的思考の訓練に最適であり「大切だ」という意見とがある。個人的にはこれに、楽しいからという“肯定的意見”を付け加えたい。楽しさの根源は第一義的には“ものづくり”であろうが、“ものを壊す”側面も無視できない。もちろん壊してばかりでは何もできないので、“作り直し”と言う方が正しいかもしれない。自分のプログラムが思いどおりに変わってゆくのを無上の喜びを感じた経験をお持ちの方も多いただろう。もちろん“思いどおりに”変わらないことの方が通例であるが、それも自分の責任であり、自分が制御できる範囲の中であれば“楽しい”ことに変わりはない。前号までプログラミングについての連載があった。可能であれば、プログラミングの楽しさを伝える記事も視野に入れてゆきたい。

教育についての理屈は数多くあるようであるが、素人目でみても絶対優位であるような理論・手法は見当たらない。さまざまな方面でのさまざまな試みの内容と結果とを共有することによって、“人”が対象である教育の問題に立ち向かってゆくべきであろう。枝葉末節をとりあげて“足を引っ張る”行為の非生産性は言うまでもない。

学会誌の編集は、基本的には7つのWGから出している。ただ記事案を、本会議(20名)で検討して行っている。学会誌へのご意見・ご提案などは大歓迎である。電子メールで editj@ipsj.or.jp へ送っていただきたい。

(平成18年3月20日)